‘ὁ κόσμος, ἀλλοίωσις· ὁ βίος, ὑπόληψις.’

67号 1993.5.24
文・編集・発行
恋怪子

LIVE: マンガンズ

1993.5.2 新宿ロフト
1993.5.16 渋谷アピア

PHOTO BY K.K

「お芝居だって、本当にいい舞台に接し感動したときは、そう手早く感想が出るもんじゃない。むしろ、人を沈黙へとさそいこむ、あるいは強制する。その力の強さと持続力に、感動の深さのほどが現れる。芝居をみたことが劇場どまりではなく、人生における一つの事件であったと思われるような場合はそうでしょう。文化ショックというべきもの。そういう場合のほんとうの感想は、手早くかぎれいな表出とは別のところにある」

——内田義彦（『読書と社会科学』より）

5月2日のロフトのマンガンズのライブは「人を沈黙へとさそいこむ、あるいは強制する」ものだった。ライブが終って、メンバーがステージにいなくなっても客席はシーンとしたままで拍手もおこらない。それくらい人を沈黙させるような、「人生における一つの事件」といえるような深いステージだった。

5月16日のアピアのマンガンズは、ヴォーカルとアコースティック・ギターという編成。ヴォーカルとギターの2人で1人といえるくらいに歌とギターが溶けあっていた。やさしさとさわやかさがあった。だからいつものように曲が終るとシーンとなるのではなくて、客席から自然に拍手がおこった。

この日、2年ぶりで「イサさん」をきいた。心の奥深くにある魂の泉といえるところからわきあがってくる涙は、汚れにおおわれているものを洗い流してくれた。「人生における一つの事件」であった。

マンガンズ ライブ：6/4 渋谷アピア 6/13 下北沢シェルター 7/3 高円寺2000GT 7/18 吉祥寺曼陀羅

イサミさん

イサミさんていう男を知ってるかい
おいらが生まれた町の乞食のおとっつあんさ
イサミさんはちょっと頭がおかしくて
もう何十年も枕でガードレールをバンバンたたいてるんだぜ
ベイビー　耳を澄してみなよ
今日もきっとガードレールをたたいてるはずだぜ

イサミさんが頭がおかしくなったのは　なぜだか知ってるかい
死んだじいさんからきいた話だと　隣の町の奴に棒で頭をなぐられたらしい
それからイサミさんはガードレールをたたきつづけている
おいらがガキのころから
ベイビー　耳を澄してみなよ
今日もきっとガードレールをたたいてるはずだぜ

イサミさんが魚釣りうまいの知ってるかい
おいらが釣った魚より何倍も大きい魚を拾った道具で釣るんだぜ
おれの町に古くから伝わる漁の秘密を
イサミさんだけが知ってたけんだけど
もう頭がおかしくなって　だれも知るものはいない
ベイビー　耳を澄してみなよ
今日もきっとガードレールをバンバンたたいてるぜ

イサミさんが戦争行ったの知ってるかい
ばあさんからきいた話だと　フィリピンのどっかで戦ってきたらしいぜ
帰ってくるなり　もう二度とあんなところにゃ行きたくねえと言った
お国のために死んできますと人を殺しにいった人と
あの当時どっちが気が狂っていたんだろう
ベイビー　耳を澄してみなよ
今日もきっとガードレールをたたいてるはずだぜ

地下鉄の階段で寝そべる男がいる
段ボール・ベッドがあったかそうだぜ
スーパーで70円のコロッケを盗む男がいる
でも奴がほしいのは70円のコロッケじゃないんだぜ
走り走り走りつづけてくれよ　おいらは
砂嵐ほこり舞って　今日を生きてる男たちに乾杯

ピンクのライトをあびて踊るヌード・ダンサー
裸のドレスがきれいだ
安酒場の女たちよ　あの歌を歌ってくれないか
踊り踊り踊りつづけてくれよ　おいらは
花嵐乱れ舞って　今日を生きてる女たちに乾杯
今日をいきてる男たちに乾杯
今日を生きてる女たちに乾杯
今日を生きてるおまえに乾杯

BOOK: 『読書と社会科学』内田義彦著（岩波新書）

いったい、お互い生きているもの同士、平素しゃべっていることを、ふだんはあまり大事に聴いていないんじゃないでしょうか。

このところ親しい友人をたてつづけに亡くして悲しい思いをくり返してきましたけれど、一番つらいのは、ああ、あの時あの人はひょっこりこういうことを言ったなとか、あそこで何か口ごもって、賛成はしたものの納得がゆかぬような顔をしたとか、生前は意識にのぼらなかったようないろんな言葉や表情の切れはしが、生々しく心に浮かんできて、これはつらいんです。ハッキリとしていて、しかし、そこに含みこまれている意味を確かめるすべがもうない言葉や表情の断片断片。その言葉、その人の全存在にかかわることいまや明確と思われるその言葉を、なぜ聴き逃してしまったか。その時ならば容易に確かめ得たその時に。

じつは、聞いてはいたんです、その時にも。でなきゃ、あの時こう言ったのはどういう意味だろうとか、あるいは表情ですね、あの時口ごもったけれど何をいいたかったんだろうかとか、言葉や表情が浮かび出てくるわけがありませんから。見たり聞いたりはしていたんだけれど、せっかく見たり聞いたりした大事なことを大事にしないで、ふっと流しちゃったということをいまになって思い知らされる。

私が死んでも、そう思って下さる人もあるわけですね。それで思うんですが、人間は死ぬと、特別に偉い人でなくってお互い普通の人間でも、死ということそれ自体によって、一つの、それだけでも大切な「後世への遺物」を残す。人が死んだ後、お通夜やお葬式の時だけではなく、生きている時も、こういうふうに大事に聴け。あるいはむしろ、大事に聴くように大事に人に接しなさい、ということです。

お互い、生きている間は、死んだ後になって必ずああこういうふうに接しておけばよかったと後悔するような接し方、つまり、人として接すべきでない仕方で接しているわけですね。死んでから初めて人間として取扱っちゃあめだ。生きている時に人間らしく接しなきゃ駄目だぞということを、死者のもつ全重量——威厳と優しさをもってわれわれ残された生者に語る。しかも、人間はみな必ず死者になるんです。そして、いま優しさと威厳をもって語りかけている死者は、さきほどまで生者として我々の間にいた。その人だって生きている時やはりこういう研究会でしゃべっていて、ただそれを聴く我々が聴く耳を持たなかった。人として当然にもつべき礼を以て対しなかっただけ。

われわれは愚かですから、何回もそういうつらい思いをし、そのたびごとにこん度こそはと心にちかいながら、また同じことをくりかえしているわけですけれども、本来、生きていた時から、生きている時にこそ、そういうふうに人間らしく——学問用語を使えば一個の人格として——接すべきものですね、人は。至愛のわざだけれども当然のこととして。人間は、人間に不可能なことを敢てして辛うじて人間になれる、そういう変な存在です。

そのように接すれば、そう接することで初めて、その人の独自な生き方、その人しか持たぬ宝が見えてきます。あの強情さがかけがえなく懐しい。死んでからしまったと思わないように、生きている間、お互い、注意深い耳をもって聴くようにしたい。いわんや、のっけから耳をかさないというようなことが無いようにしたい。初めから聴かないというのは、つまり、その人に対する全面的軽蔑ですね。人格無視。

著者の内田義彦は経済学者。「読書と社会科学」は第I章「読むこと」と「聴くこと」と、第II章 自由への断章、第III章創造現場の社会科学、の3章からなっていて、経済学に関心のない者にも面白く読める本である。とくに第I章は、音楽を聴くことを深くとらえなおすことについての示唆にとんでいる。批判のあり方、感想を文章にするあり方について書かれてあるところは、とくに読みごたえがある。「死んでからしまったと思わないように、生きている間、お互い、注意深い耳をもって聴くようにしたい。いわんやのっけから耳をかさないというようなことが無いようにしたい」私もこのことをいつも心にとめておきたいと思う。

LIVE: KOOL KRAZE 1993.5.15 高円寺屋根裏II

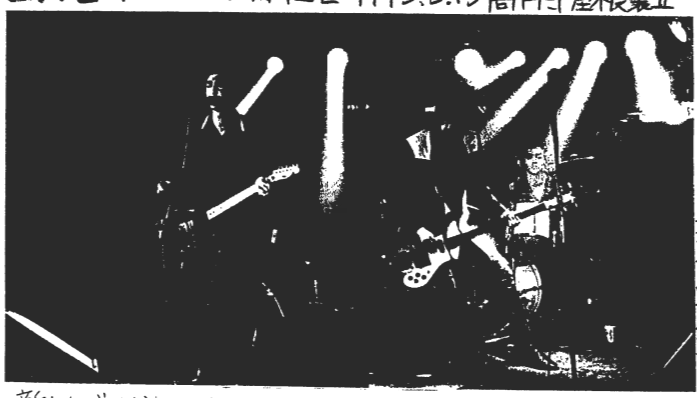


PHOTO BY K.K

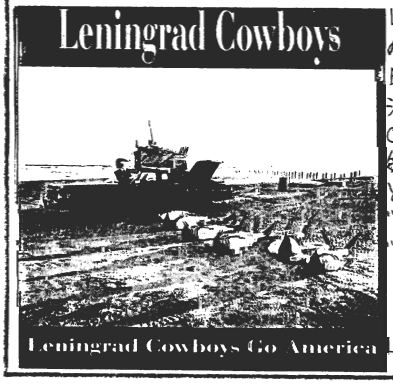
新しく心ひかれるバンドに出会えるというのは大きな喜びである。新たな広野が目の前にひらけているようで本当にワクワクする。あたりの景色ははじめてだし、空気も新鮮。そして、その景色や空気が時々にどんなふうに変化するのか未知だから心が躍る。

この日、はじまってしばらくは4月30日にアンティックできいたときよりは、歌がききとりにくかったし、ベースの音もよくきこえてこなかった。けれども3曲目にやった曲で、心がふわっと舞いあがってからは、それが気にならなくなった。投げ出すような歌、なりひびくギター、けとばすようなドラム。ゴリゴリとして無愛想なステージは実に魅力的。新たな広野に足を踏み入れる喜びで胸がいっぱいになった。

KOOL KRAZE ライブ：6/1 原宿ルイード 6/26 高円寺2000GT 7/10 高円寺屋根裏II

この日は5バンドでKOOL KRAZEが一番最後だった。KOOL KRAZEの前にやったKITCHEN SINK BOOGIEは、ひどくて、おまけに1時間以上ダラダラとした演奏をつづけるので、ムカムカして吐きそうになった。ヴォーカルはジャニス・ジョプリンもどき（男だけど）、ベースの人も髪形から弾き方まで映画「JANIS」にでてくるFULL TILTのベースのものまねみたい。あのヴォーカル、「JANIS」のビデオを見ながら、あのカッコをして鏡の前でジャニス・ジョプリンのふりの練習をしているにちがいない。ジャニス・ジョプリンの歌をあんなふうに受けとめる人間もいるってことだ。自分たちがその気になっているだけで、どこにも美しさがない。

CD: LENINGRAD COWBOYS "LENINGRAD COWBOYS GO AMERICA"



映画「レニングラード・カウボーイズ・ゴー アメリカ」のサウンド トラック版。

映画の中のレニングラード・カウボーイズの演奏があまりにもステキなので、その当時CDは手に入らなかったので、映画館で録音したテープを聴いていた者としてはとてもうれしい発売である。（ただし輸入盤）"BORN TO BE WILD", "TEQUILA", "DESCONSOLADO"などは踊り出したくなる楽しさだし、"FLIGHT AY105"や"HIGH WAY"は映画のシーンを思いうかばせてくれる。おすすめの一枚です。

このCDを教えてくれたNOBにTHANKS!